特249
60

武本喜代藏 著

死生の覺悟

（靈化册子第十四）

明志濟

始

特249
60

目次

死生と神愛……三
死生と豫定……一一
死生と信念……一九
諏訪の一角より……二九
歐洲理想主義の復興…唯この一事…身邊記（一）…苦難に與る喜…身邊記（二）

會堂大修繕に就て寄附者諸兄姉へ

靈化教會新築の爲、過去數年間に亘り靈化共鳴者諸兄姉の多大の同情を頂き、寄附申込みの現金も壹萬圓以上に達せし所、俄然起りし日支事變の爲着手に到らず今日に及びたる次第誠に遺憾千萬でした。然るに會堂は非常に頽廢し壁落ち雨漏り甚だ不體裁にして且危險の狀態と成りましたので、本年一月信徒總會の節、委員附托と成り、種々調査の上着手し、立派に竣工しました。總金額千八百五拾圓にして内外とも新らしく成り十年は大丈夫と云はるゝに到りました事は感謝の外ありません。

謹んで寄附者諸兄姉へ申上げ御承諾を得たいと存じます。

昭和十八年四月中旬

建築委員一同

死生の覺悟

武本喜代藏

死生と神愛

「神は愛なり」「その獨子を賜ふほどに世を愛し給へり」てふ聖句ほど有難く、意義深重なるはない。然り神は愛である、愛は神である。愛以外に神はなく、神以外に眞の愛は見出されない。どれほど宇宙が廣く、大きくとも神愛の行渡らぬ場所とてはなく、さながら愛の大海だ。涯から涯まで愛の暖潮が流れてゐる。明けがたの日の出の海も、餘光まばゆき入日の海も、疊の如く靜かな春の海、怒濤逆捲く冬の海も、神愛の外には一歩も出ない。强風も愛である。激浪も愛である。否衝突破船すらも深く考ふれば結局愛以外の何物でもないのである。

千々萬億の世界を越へて宇宙の最極限まで昇つていつても視よ、そこに神の愛の手は働いてゐる。海の底、黄泉の下、悪人の靈の住むてふ暗い場所迄降つていつても、そこにも神の愛は輝いてゐる。ア、何といふ有難い世界か、往くところとして愛ならざるはなく、視るものとして一つだも愛に反するものはないのである。此愛の前には寒さも寒からず、熱さも熱からず、生も死も、幸も不幸も凡は一枚であり、無差別である。神愛を否定する時にのみ差別は起り、不幸や、寂寞が感ぜられ出すのである。從來の神學は、神性中の愛と義を對立的に視て、神は義なるが故に罪を罰し、愛なるが故に赦し給ふと云ふやうに說いてきたが、自分はさう思はぬ。神に於ては愛が根本本質で、義は愛の現はるゝ道筋に過ぎない。吾人の所謂愛の中に神の怒りも、義も籠つてゐる。打つも怒るも結局愛の發現れに外ならぬ。神は愛ゆゑに怒り給ふ、愛なればこそ打ち給ふのだ。叱つたり、打つことに變りはないが、無情な繼母と、慈愛溢るゝ實母のそれとは動機が違ふ。一は打たれて怨み、他は同じく打たれて感謝し泣くのである。三世因果の佛說は、理論上立派でも愛もなければ、喜びもない。繼母の鞭そのまゝだ。天父のそれは罪に對して頗ぶる峻烈だが愛である。涙である。「父は愛する子を鞭つ」のである。

昨年の秋、靈化教會に起つた悲慘な一事實を以て死生の問題を考へよう。抽象論より事實の方が有力だから。年齡四十餘り？　優しい上品な婦人、信仰は純で、性質は鳩の如く溫和、どことて非難の打ちどころもない方であつたが、上海沖で遭難溺死した。そんな例は世間に幾らもある、新聞で見た丈けなら左程深い感じも起るまいが、自分にとつては忘れんとして忘れられぬ事だ。「先生に祈つて頂いたから安心です」「先生來年の春、キツと歸つて來ます」といふて別れた彼女、長崎の一旅館から「只今乘船します」といふた端書が絶筆で、來年の春ではなく、永遠の春まで遭へない悲しい別離れとなつたのである。

主人は支那で鑛物の採掘に從事し、一男一女があるが、長男は瀧の川で白痴教育を受けて居り、一女の婚期も迫つたので、主人の許迄送り屆ける爲の旅行であつた。汽船の衝突で、母子ともボートに乘り込んだが、乘客過多で轉覆し、娘は九死に一生を得たけれども、夫人は果敢なくなつたのである。

雨の日も、風の日も、あの遠方の小金井から、いつも靈化の集會に來て、ニコ〳〵喜んで

ゐた夫人の顔が、今もあり〳〵自分の眼に映ずる。出發前宅を訪問して祈つたが、虫の知らせか懐しさうに遠い村外れ迄送つて來られた。ア、夢だ、夢だ、小野とえ子は死んではゐない。どうしてあんな美はしい靈が死ぬものか、復活の朝、榮光のうちに再會して喜ぶ事であらう。

佛教の因果說から見れば、小野夫人の慘死は前世で造つた惡業の報ひだと云はねばなるまい。孔子教では彼女が不倫な行爲があつたから天はかゝる死を以て罰したとの結論に成らう。基督教でも極端な豫定說から云へば、神は創世の始めより彼女のかゝる死を豫定されてゐたと說くであらう。人間は先祖アダムの罪の結果として一人殘らず死刑に處せられてゐる。從つて神に於てはこんな死も當然で、慘酷でも、不公平でもないと云ふのである。が併し理屈は兎に角、我らの心情はそんな冷たい說明で到底滿足されないのである。

人生には所詮解決し難い六ケ敷い問題がいろ〳〵あるが、其最大なものは結局死生の問題だ。釋迦も孔子も、大使徒パウロでさへハツキリした解答は與えてゐない。況んや其他をや、之は神の胸中の奧秘であつて、解らぬのが本當で、解らう〳〵とするのが無理かも知れぬ。我こそ之を解決したなどいふ人があつたら、恐らくそれは逆上だ。斷じて分らぬ。「知らざるを知らずとす、これ知る也」だ、私には分りませぬと正直に白狀するこそ賢者の態度であらねばならぬ。

ダガ併し只分らんといふ丈けでは又滿足できぬ。何か少しでも分る途はないかとの考へも起らう。自分はそれを未解決の解決と稱してゐる。未解決の解決とは、死生の事は所詮人智の及ぶ所でないが、そがいかに分らぬ事にもせよ神の愛丈けは疑はれぬ。一見いかにも不合理と思はれ、殘酷と感ぜられても、結局愛以外の何物でもないといふのが、我らの解決だ。神と我らとの間には無限の深淵があり、ギヤツプがある。いつかはそれを飛び越え、凡てが明白に成る時が來るであらうが、今は何人にも分らぬ。

ドクター・リビングストーンがアフリカで獅子に打倒された時、アツといふ間に神經痲痺し、精神朦朧として、「どこから喰ふか知ら」といふやうな感じであつたといふてゐる。彼は宣教師で、醫師であつたから、學問と實驗の上から突然の死に苦痛なきを論じ、神の大なる恩惠だと云ふてゐる。

從つて難船、墜落、地震、火災、爆彈等に依る突然の死は多く無意識で、精神的にも肉體的にも他で思ふ程の苦痛はなからう。苦痛の絶頂に達した時は、もう此世のものではないからである。死生の際、幽明の間、人間の苦しみは一に精神的で、信仰厚き、罪のない人々は案外樂であらう。然し煩悶や、罪の結果自殺する人々の如き、肉體の死は一瞬間でも彼の精神的苦痛は永久消えず、肉體を離れて一層甚くなる事は疑はれぬ。

斯く考へ來れば小野夫人の死を以て直ちに神愛を疑ふ事は出來ぬ。況んや神を殘刻と非難するをや。原罪はあつても主の血に依りて贖はれてゐる。神の前には人間に分らぬ罪や、缺點もあらうが、それさへ聖靈に依りて潔められてゐるのだ。愛なる神がそんな美しい靈を憎み給ふ筈は斷じてない。理屈より直感だ、神學上の議論より我らは神の無限愛を信じたい。佛教や、運命論者のやうな消極的、悲觀的解釋を好まず、モツと積極的、樂天的、快活な、明るい說明が欲しいのである。

常識の上から云つても長いこと病牀に呻吟する人々よりか小野夫人の死は幸福であつた。長男のことが氣にかゝり、それが夫人心配の種であつたが、頭の惡い彼は、母の死と聞いてさへ分らぬ位だといふからそれも却て幸ひである。夫君や、令孃は氣の毒で、同情に堪へぬが、それも又思ひやりで、遲かれ早かれどうせ別れねばならぬ人生だ。却て一時の悲哀が彼らを救ひに導くかも知れぬ。娘にも良緣があり、夫も後妻を迎へられたら、その悲しさ、辛さも忘れて喜ぶ日もこよう。神慮測るべからず、分らぬながらも御言を信じ「神は愛なり神は愛なり」と歌ひつゝ進むべきである。

其遺骸は戰場の露と消へ、海底のモクヅと化つても、精神は死なぬ。靈は生きて働きつゝある。神は決して彼らを棄て給はない。神は其獨子を賜ふほど世を愛し給ふのである。靈界は地上と異り、眼界廣く、明かで、物の眞相を透視するから、浮雲に均しい慾心や、虚榮心は消え、今迄思はなかつた事を思ひ、信ぜられなかつたものを信じ得るであらう。彼らが碎けて「オ、主よ」と呼ぶ時、神は必ず彼らを抱き上げ、罪を赦し、遂には復活の光榮に與らしめ給ふに相違ない。かく思ひ、かく信ずる時、戰場無數の死屍を視ても希望を抱き、「やがてあひなん、やがてあひなん、めでにしものと」の嬉しい歌が自から出る事であらう。かくて悲哀は歡喜に、悲嘆は嬉し泣きに代り、こゝに世界が一新するのである。

神とか、救とか、來世の事など夢の如く、虚妄の如く想ふてゐた人々も、愛するものに先立たれたり、親しい友や、先輩が次ぎから次ぎと死んでゆくのを見ると、何となく心淋びしく、孤獨を感じ、今迄迷信だとばかり思ふてゐた宗教の事が懷かしくなる。彼ら若し一度信仰あり、人格ある眞の宗教家に接せんか、頑固な心も碎け、忽焉として入信し、我も人も不思議に感ずる事であらう。要するに人間は宗教的動物であつて、宗教なくしては到底滿足し得ないからだ。宗教は人間本性の深い欲求であるから、翻然神に歸り、其無限愛に沒入する迄、富みも、榮譽も彼らの靈的欲求を充たすことは斷じて出來ないのである。

死生と豫定

人間の運不運、長壽短命等に關し、其解答として與へられた說が三つある。仍ち偶然と、

運命と、攝理だ。第一は儒教の立場、第二は佛教、第三はキリスト教の主張である。尤もキリスト教にも極端な豫定說があつて、有神的宿命觀とでも云はるべき考がないでもないが、普通攝理と呼ばるゝ信仰は、人格的、自由の神が、愛を以て人事一切を支配し、變轉窮りなき出來事に對して適當の處置と導きを與へ給ふと云ふのである。

故文學博士服部宇之吉氏は、我が漢學界の第一人者であつたが、其著「孔子及孔子教」の中に、儒教の死生觀を詳說してゐられる。則「人間の長壽夭折、富貴貧賤の如き何れも天道から來る。天は公平で、善を爲すものに福を與へ、惡を爲すものには禍を與へるのだ。所が其反對に善を爲して禍を得、惡を爲して福を得たといふ場合があるが、之が大變六ヅかしい。

併し是は決して我々に始めから定まつた事ではなく、力を盡してやつたに拘らず、偶然さういふ事に出喰したのだ。孔子が命をいふ時さういふ風に考へてゐる。惡人は不幸で早く死なねばならぬのに仕合せで長命し、善人は長く生きて福を得べきであるのに不幸短命で逝つたといふ場合、此らは何れもさういふ處へ偶然ブツかつたのだ、丁度自分が道を歩いてゐる時、外から人が來てツキアタつたやうなものだ」云々と謂はれてゐる。

いかにも淋びしい、アヤフヤな解釋で、何の慰めにも、力にもならない。人世がもしそんな場所なら、吹けば飛ぶやうなか弱い人間ほど憐れな存在はなからう。善を爲してもいつどんな災難にブツかるも知れず、惡を爲しても滿ヨク大幸福にデクワすかも知れぬからである。仕合になつても感謝すべきものなく、不仕合に見舞はれても助けを求むべきものもないのである。

儒教は神道や、ユダヤ教のやうな現世教で、來世を否定せぬ迄も、死後に對する確乎たる信念がないから、こんな入組んだ問題になるとスツカリ說明が出來ないのである。孔子は「知者動(ハタラク)仁者靜(ハカ)也、知者樂(ヘミ)仁者壽(ハイノチナガシ)」と云ふたが、孔門第一の聖者、孔子最愛の弟子顏淵は齡僅か三十二歲で歿した。孔子は其短命を慨き、慟哭して「ア、天予をホロボせり、天予を喪せり」と云ふてゐる。仁者必ずしも長命でなく、義人必ずしも幸福でない。所詮人世は來世なくして解釋さるべきではないのである。

之に反して運命說は、大は世界の變動、國家の盛衰より、小は個人〳〵の幸不幸に至るま

で何物かエラい力があつて、豫じめ之を定め、支配してゐるのだから人間は盲從する外なく、絶對不可抗的だと云ふのである。儒教でも之を認め、人事の吉凶一に天より出づと信じ、世間でも「運は天にあり」といい、漠然ながら何か人間の禍福生死等を支配する力ある事を信じ且恐れてゐる。

佛教は此信仰をモツとハツキリと、力強く業因業果の理を教へ、運命の觀念を道德化したのである。則ち生死幸不幸の起るは必ず因と緣との和合に依るのであつて決して偶然ではない。善因善果、惡因惡果である。過去の業因によりて現在の惡報を生じ、又現在の煩惱や業によりて未來の生老病死の惡果を生ずといふのである。六道リンネはそれが爲だ。罪障ある衆生は、車輪の如くこゝに死し、かしこに生じてキワマリなしと教へてゐる。

いかにも理屈的な、立派な教へではあるが何といふ陰氣な、悲觀的人生觀であらう。いかにも淋びしい、冷たい感じだ。縛られた囚人同樣、全然自由も、活動もないのである。併しキリスト教の豫定說もやゝ之に類してゐる。則神を愛の父よりも暴君の如く見て、人の救はるると否とは神の絶對意思で定められてゐるのだから、人間は如何ともし得ないといふので

ある。

使徒パウロに源を發し、アウガスチヌスに於て深淵と成り、カルヴインに到つて大河と成り、奔流と成つた豫定說は、近代に入り大に勢力を失ふたけれども、兎に角神學界を風靡せる大思想で有神的運命說とも評すべきものである。之に依れば選ばれるも棄てられるのも均しく神の命令で、人間の意志や、行爲に依つて左右されない。神は彼らが生れぬ前から或者は永生へ、他の者は永罰に豫定されたといふのである。かくの如きはいかにも不合理と思はれるが、神の爲し給ふ事凡て善であるから淺薄な人間の標準を以て彼是批判すべきではないといふのである。

カルヴインは其著インスチチユツの中に詳細に之を論じてゐる。彼に依れば人生の事盡く神の意志に依つて決定される。凡ての成功は神の祝福であり、困難は神の呪であつて運命や、偶然の入るべき餘地は絶對ない。風が吹くのも、ナギも、安き航海も、破船も、家屋のタオレも、大火も、花のサくのも、果を結ぶのも、雨の一滴さへ神命によらずしては降らぬ。又豐作や凶作も神の恩惠又は刑罰、怒りの現れだと。甚しきは强盜が人を殺すのも神が

彼を道具として用ひ、不信の人を罰するのだと云ふてゐる。

宿命論や、極端な豫定說から云ふと、人間には全然自由なく、人を殺すも、生かすも、救ふも滅すも、憎むも愛するも、打つもナデるもみんな神に依つて定められた豫定の行動だといふ事に成るから、當人は善惡何れにも責任なく、器械人形同樣と成らう。之に反して神は、此世界の將來、個人〳〵の行動について、何一つ決定されず、無方針で一切自由放任とすれば、神は無いと同樣で、人間の運命は、さながらカヂを失ふた船の如く風のまに〳〵流れ行く外ないのである。

一面我らは神の豫定や、攝理を信ぜずして安心は出來ない。喜びも希望もない。苟くも人格的、愛の神を信ずる以上、神が我らの幸不幸も、長命短命も定め給ふといふ事に疑ひを挾むことは出來ないのである。が併し他面には、我らの運不運が我らの心掛けや、努力いかんに依る事、我らの壽命の長短も、我らの信仰又は修行の如何に大關係ある事をも信ぜずにはゐられないのである。

それゆへカントは純理性の上から人間の自由といふ事は證明されぬけれども、實踐的方面

則ち道德上の要求からしてどうしても承認せねばならぬといふてゐる。從つて以上の如き困難な問題については理論と實際とは矛盾するけれども、之を二つに分けて理論上では神の豫定を信じつゝ、實際上では善惡何れも自分が自由に擇んだので、責任は全然自己にありと直感する事だ。然らずんば道德は立たず、良心の權威も失はれて了ふからである。

我ら若しパウロや、神學者達より、眼を轉じて福音書に現はされたる主イエスを視んか、こゝに新らしい光に接するであらう。主の御言に依れば、人事一切に神の守りと、導きある事は明白であるが、同時に悔改めや、祈の必要を說かれてゐるから決して人間の自由を否定されてはゐない。矛盾の如くして調和してゐる。神の豫定を信じつゝ自己の責任を感ぜずにゐられないのである。

空の鳥、野の百合、一羽の雀、一筋の毛髮さへ神の守りの外ではない。何を食ひ、何を衣んと思煩ふなといい。風波を畏れた弟子らに向ひ、「何ゆえ恐るゝか、信仰薄きものよ」といはれた。「父の我に賜ふもの皆我に來らん」といい、一人の放蕩兒が悔改むるや、天に於て喜びありと云はれた。生れぬ前から斷罪され、地獄に定められてゐるといつたやうな陰慘な思

想は少しも見出されないのである。

若しそれ一切が神の豫定であつて、人間の努力も、改心も無益とすれば、主が「天國は近けり、悔改めよ」といはれた事の說明は出來まい。又主が信仰や祈の必要を敎へ、「信ずるものに能はざるなし」といい、「信じて祈らば願ふ所盡く得べし」などいはれた事を何と解釋するであらう。我らは頑固なる神學說に捕はれず、理性によらず直感に依り、神學に依らず、單純な信仰に依りて、愉快に快活に人世を步みたいのである。

神學の傾向は共人の過去の生活や性行に支配され易い、從つてパウロや、アウガスチンの如き罪の經驗深き人々は、人間の道德的無能と弱點をヨリ强く感じ、カルヴインの如き性格で、法律家たる人々は、神を怖ろしい裁判長の如く感じ、其神學說も之に支配されて、愛の方面より義の方面を一層强く主張するに到つたのだ。我らはそんな點まで彼らに習はねばならぬ理由はないのである。

近代哲學界の思潮は、實在は運動であり、生命は不斷の流れであつて、流動し、變化し、生長し、創造しつゝあるとの事だ。從つて神觀も又一新され、固着不動の神ではなくイエス

の所謂わが父は今に至るまで働き給ふ、我も又働くなりとの新らしい、否尤も古い信仰に歸りつゝあるのである。勿論神の支配に變易なく、其方針も一定してゐるのだが、時々刻々變り往く新事件、新時變に處して、自由に、活潑に適宜の處置を取りつゝ居給ふ事は疑はれない。

自分は神の豫定と攝理を信じ、今後の運命や、死生の事も全然神に委ねてゐる。最善の時に最善を爲し給ふと信ずる時、何らの不安も恐怖もないのである。然しながら同時に我らは神と人への義務として、健康を求め、長壽をも願ふてゐる。運動もし、攝生もする。それが果して益ありや否やは知る所でない。たゞ「我に任せよ」と云はれるから任すのである。「求めよ」といはれるから求めるのである。それ以上の事は全然知らない。所詮人智に及ばないから考ふる必要もないのである。

死生と信念

「一日に十二時あるならずや、人もし晝あるかば、此世の光を見るゆゑに躓くことなし、夜

あるかぎ、光その人になき故に躓くなり」(約一一の九)と主はいはれた。人間一代を一晝夜に喩へ晝の十二時間は神の定め給ふた我らの時だからどんな危險の中に入つても心配ない。斷じて死なぬ、光則ち神の救、神の冥助があるからだと。いつ迄が自分の十二時間か誰にも分らぬ。我らは只信じて進むのみだ。置かれた場所に從順に、其職務に忠實であればそれでいい。生死は神の事、全然念頭に置く必要がないのである。

光のない夜の十二時間とは何を意味するかといふに、それは神意を無視し、良心や、義務の命ずる所に背いて、我儘勝手な歩みをする事だ。例へば兵士が生命を惜んで敵に後を見せるとか、醫師が傳染を恐れて病家の招きに應じないとか、男女が堅く一生を盟ひながら、他に愛人が出來て無情にも相手を振棄てゝ了つたとか、甚しきは信者や、傳道者が迫害を恐れてキリストを否みつゝ逃げ出すといつた場合をいふ。其時彼らの上には光がない、夜だ。從つて一時生延びてもキツと何かに躓き倒れるのである。

「已が生命を救はんと思ふ者はこれを失ふ」と主はいはれた。そこに未練がある。スき間がある。敵に乘ぜられる、從つて救はんとした生命を却て失ふのだ。劍客や禪僧の修業の秘密は「駭かぬ事と、怖れぬ事」だときいてゐる。駭くのは主心が決定してゐない。怖れるのは死がこわい、生命が惜しいからである。眞に死を覺悟したものは、何事にも恐れず、駭かない。誰の前にも磐石をすゑたる如く、大山の聳ゆる如くだ。暴漢でも猛獸でビクともするものではない。獅子や、虎でさへ睨み返すのである。

使徒パウロは「われ日々に死ぬ」といふた。然り毎日死ぬのだ、死の稽古だ。一歩家を踏み出したら死體で歸ると覺悟する。いかにも厭な話のやうだが、それでスツカリ安心が出來る。度胸が据る。何事あつてもビク〳〵しなくなるのである。自分ばかりの事ではない。大恩ある父母、最愛の妻子も今日一日の生命、明日は亡いものと覺悟すれば、小言や不平もやんで親切に、大切にする事であらう。

そんなに死ぬことばかり考へたらメイるやうで陰氣になつて、却て死を早めるではあるまいか、人間はモツと陽氣に、快活でありたいなど云ふ人もあらうが、それは先づ死を覺悟してからのことだ。死の覺悟さへ出來たらモウ何一つ恐れなくなる。大歡喜、大感謝だ。夜はガラリと明けて、百年は愚か千年萬年生き通しだ。「大死一番、大歡喜を生ず」人間は何より

先づ死を覺悟せねばならぬ。死の一字を決定してそれから仕事にかゝるのだ。死を恐れ、死の字を箱に納めて置いて何が出來るものか、戰場は無論の事、職場でも講壇でも「主心定まらずば、おくれふるへて一向用には立たぬ」。人間は生の問題より死の問題を第一とし、思切つて死線を飛び越へたら、「重厚山の如く、寛大海の如く」にして大事を成し得るであらう。

世人は之を轉倒し、死と聞いてさへふるへ上りながら、いかにして長壽を保ち、どうして若返へらうとばかり苦心してゐる。長壽法もいい、衛生術も結構だが、それらは抑々末の末だ。先づ死ぬ事だ。死を體驗し、死の門をクグつた上でないと何をやつても力は出ない。窮鼠猫を嚙む、捨身ほど恐しきはない。サア來い、生命はやると大手ヒロげてツツ立つた漢にはかなはない。

精神的に死を征服し、死に打勝つた人間は不養生もし、亂暴な生活しても案外長生してゐる。清水次郎長は若い時、一旅僧から「氣の毒ぢやが、お前さんは三年の間に死なねばならぬ」と云はれ、「どうせ三年の生命なら、此世をフトく、短かく暮してやれ」と覺悟して俠客と成り、あれ丈け活動して七十四まで存命した。

來年は九十だといふのに今猶饅鍔としてゐる頭山翁も、ヤツぱり生命知らずだ。若い時、禪僧と辛棒くらべして五日五晩、飲まず食はず、一語も發せず、不眠不動で坐り込んだ事もある。「人間の持つ慾といふ慾を一切ホオり出して、ヒトエ一枚にハダシ、野宿、山宿、墓場でも何でも平氣で、あれば食ひ、なければ食はずに旅した事もある」との事だ。

主イエスに天父の定めし時があつたやうに、平凡な我らにも定められた時がある。其時の來る迄どこに往つても、何をしても死なぬ。否神が死なせないのだ。使命を果す迄我らは不死だ。使命が終つたらモウ生きる理由もなく、必要もないのである。それは形式的に信者たると、未信者たるとを問はない。天は誠意と私心なきものにクみする。彼らはそれ〳〵の使命があつて生きてゐるのだから、それを成しトげるまで神は彼らを保ち、冥助を與へ給ふ。夜は來ない、從つて躓かないのである。「五羽の雀は二錢にて賣るにあらずや、然るに其一羽だに神の前に忘れらるる事なし」(路十二・六)「二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝らの父の許なくば(意志によらずば)その一羽も地に落つることなからん」(太十・三・二九)である。千羽のうちの一羽だに、神の許しなくして、何人も之を打ち落すことは出來ない。

況んや人間をや。神の許しなくんば彈丸雨と飛ぶ中でも其一發だに當らぬ。惡人の刄も、猛獸の牙も斷じて我らを害することは出來ないのである。

が併し神が死を許し給ふと云ふ事であれば、いかなる名醫も、良藥もどうする事も出來ない。人間は只服從するのみだ。いかに慘刻と見へても結局それは良いことであり愛の外ないのだから感謝して逝くべきである。大膽も勇氣も此信仰から出る。彼らは恐れず、駭かない。岩の如くツッ立つてゐる。從つて敵も近く能はず、猛獸も侵すことが出來ないのである。

敵は白刄を提げ、ダム〳〵川の畔で讀經しつゝあつたマホメットを打たんとしたが、知るや知らずや、彼は一心不亂に讀んでゐた。其神秘な聲と、潺々たる水音と相和して一種不思議な靈感を與へ、敵は覺へず刄をナげて罪を懺悔し、其弟子と成つたのである。カーヂナル、ボロメオが聖壇の前で祈つてゐると、敵は背後から砲聲一發、彼を倒さんとした。が併し彼は微動だもせず祈つてゐたので、敵は其儘退却して了つたのである。

「天德を予にナせり、桓タイそれ予を如何せん」といひ「自ら反してタダシければ千萬人と

雖、ワレ往かん」などいふた孔子は、宗教家でなかつたけれども、優に宗教の眞髓にふれてゐる。「英雄頭を回らば卽神仙」西郷でも、頭山でも一種の宗教家とも云へよう。其思想や、信仰の精粗純不純は別として何物か偉大な力を信じて、死を恐れず、一意使命の爲に猛進する所は宗教でなくて何であらう。徒らに神とか、キリストとかいひつゝ生命を惜み、死を恐るものゝ如き宜しくザン死すべきである。

一切空と悟るもエラいが、凡てを神愛の現れと信じて畏れず、憂へず、喜んで萬難に處せんとする事ほど偉大な悟りはなからう。生も死も順境も逆境も盡く神の無限愛の外ではないと覺悟するのだから冷たい、淋びしい心境でなく、苦難のドン底にも喜び且つ躍るのである。が併し殘念な事に米英宣教師風のキリスト教には修行が足らぬ。否殆んどないと云つていい位だ。

吾人の所謂日本的基督教はその點が大に違ふ。分つた丈けでは何にもならぬ。形式や、感情はダメ。修行だ、體驗だ。身を以て體得せねばならぬ。血の出る程の修行なくして所詮そんな境地に達せられるものではないのである。信仰によつて救はれるといふ事には修行も努

力もイらぬけれども、其救ひが我が物となつて一切の束縛よりトかれ、絶對の安心、不斷の歡喜に入る爲には、克己、忍耐、祈禱と練達を要する。サタンと闘はねばならぬ。食をタち、夜をテツして祈らねばならんのである。

米英宣教師達は本國會社から澤山の俸給を受け、贅澤な宣教師館を與へられ、下女下男を使ひ、妻子と樂み、夏は輕井澤、冬は別府と云つたやうな生活して、碌な仕事もせず、七年過ぎたら歸國して一ケ年の休養が樂めるといつたやうな狀態であつたから克己も修行もイつたものではなかつたのだ。そんな人々に導かれ、感化された日本の信者、教役者にも其惡影響は及び、確信も、度胸もない片々たる小才子や、輕薄な、感情的婦人などの少くないのはナサけない事である。

パウロは云ふた「我おもふ、神は使徒たる我らを死に定められし者の如く、後の者として見せ給へり、實に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも觀物にせられたり」と、又曰く「今の時にいたるまで我らは飢ゑ、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、手づから働きて勞し、罵らるる時は祝し、責めらるるときは忍び、ソシらるるときは勸めをなせり、我らは今に至るまで世のアクタの如く、萬の物のアカの如くせられたり」と、讀みつゝ涙が出る。之れでこそ眞の基督者だ、眞の教役者である。

私共は別な福音、新らしいキリスト教を宣傳するのではない。使徒的、聖書的キリスト教だ。それは主が血を以て教へられたもの、使徒達が身命を拋つて傳へたものである。それは米英宣教師らに依つてゆがめられ、我が國職業傳道師や、輕薄信者によつて變形された安價な傳道、無價値な信仰ではない。我らは何年信じても何の力にも、生命にもならないやうなエセキリスト教を棄てゝ、モツと生命と力のある眞のキリスト教、使徒直傳の活きたキリストを傳へねばならぬと主張するのである。

主の最後の大苦難といひ、カルバリの暗澹たる死といひ。主復活後の信者や、弟子達の生命懸けの傳道といひ、何れから見ても、今日の信者や、教役者らが安逸を計つたり、暖い家庭生活を樂んではゐられぬ譯だが餘りに物質的に惠まれ過ぎた米英宣教師や、信者達は知らず〳〵ダ落して主を辱しめ、福音の眞價を落して了つたのである。若しそれ使徒達が日本に渡來して我が國民精神を充分理解し、その上で直接キリストを傳へたなら、恐らく我が國

智識階級の多分は喜んで信じた事であらう。道元や白隱に共鳴する日本の有識者らが、ヨハネや、パウロの信仰及び人格に感じない譯はないからである。

今や我らはクリスチャンとしても、日本人としても何れも皆死を覺悟して立たねばならぬ時と成つてゐる。祖國の爲、キリストの爲には、いつでも喜んで生命をナゲ出す覺悟でなくてはならぬ。或意味から云へば實に愉快である。利己的で、自分の事きり思ふてゐるやうな人間は却て耻かしい死をトゲよう。我らは生くるも死ぬるも勇ましく、英雄的、殉道者的態度でありたいのである。世界の大半を私有視し、物資山の如くクサる程積んでゐた米英人に、どうしてキリストの十字架が分るものか、犧牲献身など言葉丈けで實行さるべくもないのである。信仰といつても頭の上のこと、愛〳〵といふても猫をカブツて手を握る位のこととなつてゐたのである。此意味から今回の大戰爭は神の怒であり、信仰の試錬であつて眞のキリスト教を米英人の手より、異教國とあなどられたアジア民族に引渡すべき機會とも成らう。快無限である。

諏訪の一角より

武本生

歐洲理想主義の復興

米英を敵として戰ひつゝある我が日本は、獨伊を盟邦とし、佛蘭西との國交も次第に近密を加へつゝある。が併しそんな一時的、政治的方面ではなく、モツと深い思想的、精神的關係から我らは前者より後者に共鳴を感ずる。何となれば米英は大體に於て現實主義、功利主義だが、獨逸民族は概して理想主義、精神主義だからである。前者は商才あつて士魂なく、後者は寧ろ共反對の國民性を有し、日本民族と近いものがある。

十九世紀は現實主義、物質主義全盛の時代であつたが、他面に於ては一時沈衰せる理想主義、精神主義勃興の時代であつた。カントに歸れとの叫びは起り、フランス特にドイツに於

て其傾向は著るしい。之は明かに古代ギリシヤ理想主義の繼承であり、キリスト教的神秘主義の復活だといはれてゐる。キリスト教は最も嚴格な意味に於て理想主義であり、又精神主義だ。從つて現實主義と容れず、物質主義と衝突せざるを得ないのだが、今や時代は逆轉して再び理想主義勃興の時代と成つた事は喜ぶべき現象である。

ウイルヘルム・ヴントの近著に依れば、ドイツ理想主義は、哲學と宗教特にキリスト教との結合に依つて生じたものらしく、其傾向を尤も完全に代表したものはライブニッツだが、レツシング、ヘルデル、そして最後にカント自身も彼の思想に影響されたとの事、其他ヴォルフあり、シュライエルマツヘルあり、フイヒテは實にドイツ理想主義の精華と稱せられ、ショーペンハウエルや、ニイチエ・オイツケン等の如きも理想主義の哲學者又思想家として世界に知られてゐる。

此點ドイツ民族は實に偉い。續々偉大な哲學者を出たし、理想主義を以て米英の現實主義を壓しつゝあり、フランスにもブートルーや、ベルグソン等があつて此主義を代表してゐるけれども、何といつても現代に於ける理想主義の直接地盤はドイツである。我らは同盟國として大に意を強うするものがある。

日本は軍事的、政治的に於てドイツに遜色なしとするも、哲學的、思想的にはマダ及ばぬ。近頃日本哲學などいふ書物が刊行されつゝあるが、讀んで見れば印度哲學、支那哲學の燒直しだ。將來日本にもライブニッツや、レツシングや、フイヒテ、シュライエルマツヘル、オイツケンの如き大哲學者が輩出して、我が國固有の理想主義、精神主義を發揮し、宣揚するに到らんことを祈らずにゐられぬ。徒らにお國自慢に流れてはイケない。モツと遠大な、謙虚な心を以て廣く知識を世界に求むべきである。

只この一事

主はマルタに向うて「無くてならぬものは多からず、唯一つのみ」と云はれ、パウロも「唯この一事を務む」と云ふてゐる。世間の事でも一事に徹底すれば名を爲すが、多般に亘れば平凡に終る。況んや宗教信仰に於てをや。念佛宗が彌陀一佛に專念するやうに、キリスト教も亦キリスト一神に集中されねばならぬ。キリストさへ獲れば人間萬事は解決する。

キリストのうちに、念佛も、坐禪も、儒教の人倫五常も、神道の生々主義、現世主義も、近頃流行の心理療法や、各種の健康法も盡く包括されてゐる。何を苦んでか左顧右眄あれを讀み、これを聽く必要ありや。キリストに徹底すれば、親鸞の念佛三昧も、道元の不斷參禪も體驗せらるべく、孔子の仁義禮智信も、神道の祖先崇拜、報本反始、家族制度、祭祀も、禊も洩す所はない。言や形を異にするのみ、精神に到つては則ち一だ。

絶對の靈であり、生命であり、愛であり、力である彼を獲るといふ事は、神學研究でもなければ、原語の勉強でもない。註解をあさつても、交讀文を幾度繰返してもダメだ。聖言を體讀し、體驗し、深思し、反省し、御靈に示めされ、感涙に咽びつゝ實行するのでなくてはならぬ。此意味に於て、我らは未だ眞に聖書を讀んだとはいへない、況んや分つたなど假りにもいへたものではないのである。

「無くてならぬものは多からず」唯一無上の此寶を獲得すべく我らは多讀や、多言を廢め、用もない世評や、政治談などに時を潰してはならぬ。一藝に達し、一國語を修得するさへ、晝夜不斷の練磨を要する、況んやキリストを體得するをや。「多く學べば體疲る」思想も散亂する。無益な挨拶、無駄口、冗談、議論など成るべく避け、四六時中、心と思ひを彼一身に集中せねばならぬ。それが爲眞の社交は決して妨げられない。社會は結局眞面目な、親切な人を信頼するからだ。

キリスト體得の結果は、人生觀の一變である。人格の更新である。不平より感謝へ、高慢より謙遜へ、憂鬱より歡喜へ、憎惡より熱愛へ變ることである。怠慢より勤勉へ、病弱より健康へ、束縛より自由へ、利己より博愛へ移ることの外ない。それ程の一大事を棚に上げて、ツマらぬ事に忙殺される愚かさ、我らは奮起一番、此大目的に向つて猛進せねばならぬ。祖國の爲だ、世界の爲だ。主はかゝるものと成すべく我らを召し給ふたのである。

身邊記（一）昭和十八年

▲二月十一日（木）人生の無常をシミ〴〵感じて佛門に歸し、高僧となつた人々の傳道はマジメだ。其人格も高い。法然は九歳の時、父を打たれ、臨終の遺言によつて出家した。弟子の親鸞は又四歳にして父を失ひ、八歳の時母に死なれ同じく九歳で出家した。それとは正反

對の自力宗、禪の名僧道元も同じ人生の無常から出家したのである。彼の父は內大臣藤原通親で、道元が三歲の時に歿し、母は八歲の時世を去つた。孤兒となつた彼は母の遺訓に從ひ十三歲にしてエイ山に上り、遂に佛門に歸したのである。宗旨は聖道門であれ、淨土門であれ、野心や生活から宗敎に投じたのとは違ひ、何れも動機が純だ。從つて其信仰も徹底し、感化も博く、深く、後代に及んだのである。感謝〳〵時々刻々、感謝せねばならぬといひつゝ午前に起つた或小事から暫し不快を覺へた。疲れて橫に成つたまゝフト感じ「ダメだ〳〵、モウ濟んだ事ではないか、何もさうもだへるワケはない」と直ぐ心が一轉した。「神樣、ア、此一刻、此一殺那を感謝します、先刻は過ぎました。後刻は未だ來ません、私は今の此一息、此一刻を喜ばねばなりません」と。紀元節、小春日和だ。非常な人出、明治神宮へ參拜し、歸つて終日讀書。

▲十二日(金) 孔子は五十にして天命を知るといふた。天命を知るとは自己の使命をハツキリ悟つたといふ意味らしい。彼は天下を周遊して其理想を說いたが、どこにも用ひられず、或時は弟子とともに飢へ、或時は又殺されかけた事さへあつた。兎に角不成功で、不遇の一生に過ぎなかつたのである。が併し天は彼に大任を托した。則ち聖道を世に明かにし、天下を幸ひに治めんことであつたのだ。彼は之が爲に生き、之が爲に努力したのだから、世間的成敗の如き問題ではなかつたのである。大なれ小なれ、我らも又天命を知らねばならぬ。神は我に何を爲さしめんとし給ふやと考へ、それが分つたら區々たる名利を一擲して、使命の爲に努力せねばならんのである。此年の寒さもモウ峠をコしたらしい。一番寒かつた頃も朝な〳〵未明に散步したが、此後は樂だ。物資缺乏の此頃でも、主は思はぬ人々を通して必要を充たし給ふ。眞に感謝だ。

▲十三日(土) 「世間の人も衆事を兼學して、いづれも能くせざらんよりは、ただ一事を能くして、人前にしてもしつべき程に學すべきなり……高廣なる佛法に事の多般を兼ぬれば、一事をも成ずべからず……學人つとめて一事を專らにすべし」とは道元のよい戒めだ。基督者は此一大事、則ち活けるキリストを體認し、體得する事に餘念があつてはならぬ。キリストさへうれば釋迦も孔子も含まれてゐる。何ぞ他に心を移さんやだ。自分は儒佛を學べは學ぶ程キリストが一層有難く、尊く感ぜられ出した。偏狹な宗派心など毛頭ないが、心を空う

し、公平に考へての結論は大ナポレオンが云ふたやうに「われ人を知る。ナザレのイエスは人にあらず」だ。遙かに人群を超越してゐる。遠近からの巡回の要求がある。自分も久しぶりに出て見たいが、宿が問題だ。今日の場合ウツカリ出てゆくと臺所を困らせよう。旅館はゼイ澤だ。暫く時機を俟つ外なからう。

▲十四日(日) ビリビ三章八―一二迄を暗誦せんと思ひつゝ長くて斷念してゐたが、今朝數回くり返すうちスラ〳〵讀め出した。記憶は腦髓でない、精神だといふ事が一層ハツキリした。祈禱中フト想ふた、萬一醫者からガンだとか、肺ケツカクの末期だなど云はれたら、自分はスグ覺悟して勇躍奮鬪、歡喜に充たされつゝ活動しようと。死が一年後でも二年でも、否六ケ月後でもいひ、悲觀や煩悶などする暇は毛頭ない。一刻千金だ。說教も執筆も生きて人の肺腑をツくものがあらうなど考へつつ愉快であつた。今朝の禮拜は終始緊張、聖靈に充たされてゐた。天氣もよく、集會も多く、何れも喜色滿面であつた。予は所澤へ急ぎ、役員達は遲く迄會堂大修繕の相談をした。

▲十五日(月) 「論語讀みの論語知らず」といふ言がある。論語を讀み、論語を講じつつも、實際の言行が論語の主旨と合致しないからだ。自分自身は十分解つたつもりでも、其實分らず、眞意に通じてゐないのである。聖書讀みの聖書知らずも同樣だ。成程聖書を讀み、神學も學んだであらうが、其人格や、行爲が否定してゐる。讀んだのは文字だ、知つたと云ふのは頭丈けで、體驗し、體得してゐない。勉强が足らぬ、專心でない。御言が腹の底に徹する迄眞の力や、喜びは湧き上らないのである。

▲十六日(火) 苟くも道に志し、救世を以て任ずる以上、惡衣惡食を耻ぢたり、虛禮虛式に拘泥して、あたら時を費し、心思を勞すべきでない。餘りに非常識で人に不快を與へてはならぬが、一番大切なことに注意を集中して、どうでもいいやうな事は第二第三に置かねばならぬ。終日机に對して且讀み且書きつゝ左右に置かれた梅の盆栽と紅黃白の切花とを眺めてゐる。一寸氣が變つていひ、何事にも極端は禁物だ。キツと反動が來る。信仰でも熱狂してはならぬ。靈的活動のうちにも閑日月があつて、タマには小供と遊んだり、映畫や劇を見たりする。或人には一寸誤解されようが、經驗がないからだ。靈的疲勞は全然靈的でない場所や見物でないと醫されない。力ある一時間の說敎は八時間の休息を要するといはれてゐる。

▲十七日（水） 四月發行の冊子原稿漸く完成、隨分の骨であつた。ダガ併し之が自分唯一の仕事だ。寸陰を惜んで書かう。一字一涙だ。無益の訪問や、集會をやめ、場合によつては面會も謝絶しよう、一人二人のために冊子がおろそかに成つてはならぬ。先夜も始めての求道者？ が來て理屈云ふから、自分は「又入らツしやいとは云はなかつた」眞にキリストを求めるなら、冊子を讀んで貰ひたい。自分の云ふ事、思ふ事はみんな此うちに盡されてゐる。商賣的と思はれてはと從來多少遠慮したが、今後は態度一變、冊子を讀め、他に勸めて呉れと不遠慮に云はう。讀むもイヤ、勸めるもイヤだが自分に逢ひたいと云ふやうな人々の爲に多くの時を費すことは出來ぬ。時は進む、餘生は短い。キリストを眞に求むる人々の爲、自分の時と力の全部は傾注されねばならんからだ。冊子を送られて迷惑な人はドシ〳〵返して頂きたい。渴いて求めてゐる人もある。一人の讀者を得る事は、一匹の迷羊を見出した事と神の御前に喜びたい。

▲十八日（木） 今朝床のうちで約十五章一―七を暗誦、「我に居れ」との御言が繰返へされてある。彼に居るとは單なる感情でない。御言が腹の底迄染み込んで湧き出す事だ。其結果「愛、喜悅、平和、寛容」等の果を結び、更にそれが他に及んで、多くの人々を主に導くのである。我らは主を離れて何事も出來ない。早朝學習院前を散歩しつゝパウロは實にえらい、或意味からキリスト以上だなど思ふた。惡魔の聲だ。歸宅後、又も葡萄の樹の喩を讀んでハツキリ示めされたのは、彼と是とは天地の相違、丸で段が違ふ。パウロがどこに「我に居れ」とか「人もし我にをり、我また彼にをらば多くの果を結ぶべし」などいふたか、福音書は直接神の言だが、彼の書簡はどれ丈け深大雄渾であるにしても、要するに單純にして而かも森嚴なイエスの御言の解釋たるに過ぎない。午後婦人會。

▲十九日（金） 若し突然狂人や、醉ひドレが惡口したり、棒で打つて來てもマサカ彼と口論したり、打合ひをする程の馬鹿もあるまい。三十六計ニグルにしかずだ。その如く何かで無暗みに激昂し、暴言亂行するものと爭ふべきでない。ダマツテニゲ出す事だ。卑怯物の如く見へて其實眞の勇者である。昨日の暖さに引代へ今日は又格別の寒さ、「親鸞と道元」といふ書名に引かれ、或人の五百頁の大著を一讀したが益なく直ぐホウツて了つた。決論は只親鸞の念佛も、道元の坐禪も結局一つだと云ふに過ぎなかつた。釜山の藤田兄「時局下萬事に奮

闘を要する時、先生の信仰を通して酌めども盡きぬ生命の水を與へられ、唯々有難う。感謝あるのみ……」

▲二十日(土) 傳道〳〵といつても眞にキリストを握り、キリストを體得させようとではなく、教會に引込みさへしたら、それで成功の如く想ふ傳道程無意味な、有害な事はあるまい。そんな信者が增せば增す程教勢は衰え、教會は權威を失ふ丈けだ。人數など問題でない。キリストの要求は「或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の實を結ぶ」眞劍な男女であらねばならぬ。反抗心は人を英雄にする。エライ力だ。他から侮辱されると、弱者も勇者と成り、咄辯も雄辯と化せずにはゐない。パウロはユダヤ教に。ルーテルはロマ教に反抗して立つた。野心や、利己からの反抗は、自他を傷けるが、飽く迄正義と愛に立つてのそれ程有效な、腐敗や墮落への清涼劑はなからう。

▲二十一日(日) アナニヤ、サツピラが聖靈に對してイツワリ、ペテロの一喝で卽死した事から苟くも聖靈の惠みに與らんと欲するものは、僞善と虛榮の二つを根こそぎ刈除されねばならぬ事を强調した。禮拜後、傳道委員の協議會を開き、今後の運動方針を靈化冊子の配布に置き、毎月十部づつ引受け盡力する人々を募集する事に決した。どこの待合所や、集會所などにも備へ、知人から知人に廻覽させ、病人を訪問しては適當な個所を讀みきかすやうにして頂きたい。

▲二十二日(月) 出征中の三男弘三に勳章下附の御沙汰があつたので、早朝川崎市の東部第六十二部隊に出頭した。玉川を經て十餘丁上つて行けば、見晴らしのいい丘上に建てられてゐる。好天氣、慰靈祭執行中で遺族が續々集つて來る。肅然として遺品を受取りつゝある人々を眺めつつ萬感胸に迫つた。歸途三人づれの聖女らに逢ふた。白と黑の法衣で全身を掩ふたカトリツクの尼僧達だ。其中の一人と偶然行き合ひ、一寸エシヤくすると、向ふも無言でニツコリした。ア、何といふ上品な、優美な顏であらう。天女かと想はれるやうな氣高い風姿、多分フランス邊の貴族の娘でもあらうか、生れつきが立派な上に、虛榮や、慾念を絕つて神に仕へてゐる結果、人間の姿がこうも尊く美しくなるものかと今更の如く感じた。

▲二十三(火) 近頃自分は讀んだ本の要領をノートブックに寫し、電車や、待合所などで何度も〳〵繰返してゐる。ヨシ萬卷の書を讀んでも、記憶せず、應用せずんば何の役にも立た

ぬからだ。今日も或所で人を待つ間熱心にノートで勉強した。内に誠あれば外に現る、故に君子は其獨りをツツシムとかや。人の見ぬ所も、見る所と同じやうに、隱すべき所は隱し、恥づべき事は恥づべきである。人の見る所では誰でも愼む。君子の及ばざる所はそれたゞ人の見ざる所乎。獨愼の工夫こそ大切であらねばならぬ。

▲二十四日（水） 今朝三時眼ざめ、火の氣一つない部室で、約三時間祈り且靜思した。隨分寒かつたが覺悟さへすれば堪えられぬものでもない。故島地默雷氏や、金子大榮氏等は、彌陀も、淨土も觀念的存在で實在ではないといふてゐるけれども、熱烈なる人間の宗教的要求は、そんな理念に滿足せず、彌陀を人格的に、淨土を西方の或世界と信ぜずにはゐられないのである。一切を空と觀じて立つた佛教として、いかにも矛盾だが、人間の弱さと、不完全を感ずる時、外側より抱擁してくれる慈母の如き彌陀や、彼岸の極樂世界を希求せずにはゐられないのであらう。之に反して我らがキリストの現在や、天國の實在を信ずる事は、頗ぶる自然で、無理がない。父といひ、子といひ、一寸淺薄に聞えるが神は始めから人格的存在で神のいます所が直ちに天國だといふのだから徹底してゐる。佛教の如く佛も衆生も、あらゆる世界も一切空と否定しつゝ、直ちに其背後に彌陀や、淨土を肯定し、眞空のうちに妙有ありなど苦しい說明を要しない所に、キリスト教の長所と力がある。某姉來訪、按手祈禱を求めらる。

苦難に與る喜

眞にキリストを知り、キリストを體得したものは「其死に效ひて彼の苦難にあづかる」を光榮とし、喜びとする。其死は磔殺だ、其苦難は靈肉一切の惱みである。磔殺を覺悟したものに餓死や、凍死が何であらう。其苦難に與るべく喜ぶものに取つては貧も、責めも、侮辱も排斥も問題ではないのである。

凡そ人間は期待が大なれば失望も大きく、何ら期待せず、少くとも期待が小さければ失望せぬ。否當り前の待遇でも款待されたかの如く喜ぶのである。尋ねて往けば一家大喜びであらうとの期待が失望の元だ。玄關拂ひを覺悟して行けば、澁茶一杯も嬉しからう。

何故眞の基督者が迫害困難のうちにも喜ぶかといふに、彼らは世から歡迎されようなど夢

にも思はぬ。全然期待しないのだから失望もしなければ、腹も立たぬのだ。其死にナラひて十字架を期し、其苦難に與るべく、飢と、謗りと憎みと詛ひを寧ろ喜ぶものに、何の失望や、悲觀があらう。感謝は盡きず、喜びは絶えないのである。

之に反して淺薄な光明主義や、ニコ〳〵主義、滿腹主義、理想も信仰もない立身出世主義の如き、いかにも幸福で、愉快らしくはあるが內心不安は絶へず、災禍を恐れつゝ日を過してゐる。彼らの生涯は現在、未來地獄だ。一天快晴の日は永久に期せられないのである。

人間幸不幸の別れ目は、十字架目懸けて勇ましく突進するか、此世的幸福や、快樂を求めて愚圖〳〵して了ふかだ。前者は一見いかにも苦しさうだが、其實常住不斷の天國であつて、後者は地獄から地獄と續く、得れば失はんことを恐れ、得ざれは天を恨み、人を咎めてゐる。現在も未來も平安幸福は期せられない。

今年三月下旬の受難週には、減食や、斷食を實行したが差程苦痛でもなかつた。顏に唾きされ、拳で打たれながら默然たりし主を想はゞ、人の惡口や、亂暴にも堪えられよう。人間は覺悟一つだ。滿らぬ事で怒つたり、激してはならぬ。「其日には喜び躍れ」云々。そこ迄行けば最早何物も我らを不幸にし得るものはないのである。

身邊記（二）昭和十八年

▲二月二十五日（木）　人の人格品性の高下は、財に對する態度如何によりて判斷される。神も又それを以て審き給ふ。財をもちながら出すべきに出さず、拂ふべきに拂はぬものは下の下で論外だが、キマつた丈けは嚴重に出し、拂ふべきは拂ふても、それ以上の獻金や、同情など決してしない人々もある。自分ではそれで滿足し、人にも神にも義務は果したと思ふてゐるのである。第三の人々は定つた以上に、ハカリをよくして餘分に與へる。「押し入れ、ゆすり入れ、溢るるまでにして人のふところに入れる」そんな事をして經濟が立つものかといふは人間の勘定で、神のそれは違ふてゐる。「人に與へよ、さらば汝らも與へられん」である。思はぬ事で、意外な人から惠まれ、與へられる。前者が神にも人にも嫌はれ、奇禍や、病氣や、放蕩兒や、事業の失敗などで取上げられるのとは反對で、天よりも人よりも敬慕され、物質的にも必要は充たされ、いつも歡んでゐるのとは大違ひである。

▲二十五日(金)　過般信州の山奥でフト感じた。別に之といふ譯けもないのに、或日行詰つたやうな淋びしい氣になつた。其時忽焉「まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけ人の子の上に神の使達の昇り降りするを汝ら見るべし」との御言がいつになく強く示された。「アヽさうだ、行詰りとか、淋びしいとかいふことは、ツマリ天がとぢてゐるからだ。天ひらけ、神と我との交通さへ自由になつたら八方無碍、四通八達だ、どこまで行つても行詰りはない。淋びしいどころか天上天下、無數の萬衆は我を取卷いてゐるではないか、地上に於ける小さい愛の業も、天の使達の前に喜ばれてゐる。世人も又了解し、同情しよう。愉々快々だ。何の悲觀や、失望があらう。夕日がまばゆく西山を反映しつゝあるやうに、人間も末路晩年は、宜しく勇氣百倍して內的、精神的に活動せねばならぬ」など想ふのであつた。寒い夕、火の氣の少い祈禱會で、使徒の苦難を語り、特に忠實な某兄が精神異狀で入院したときゝ、一同心を合せて祈つた。

▲二十六日(土)　今朝未明祈のうちに昨夜の病める兄弟の事が氣に懸り、面會謝絕と聞きながら、逢へなくてもいい、兎も角も尋ねてこようと決心して家を出た。病院は某市のハテ、小高い丘の上だ。事務の人に事情を語ると至極叮嚀に案內された。入院前は晝夜騷々しく、家內の人々は眠れなかつたといふ事であつたが、意外な落付き、平生と少しも變つてゐない。「此遠方まで御老體の先生をわづらはし、何とも恐縮に堪えません。實は今朝、「神秘的基督敎」を手にし、三四頁の「神は一人の罪人の死をさへ好み給はず、悔改めて生きん事を求め給ふ」との御言を拜し、神は自分如きものをも捨て給はぬかと嬉れしくてノートに書きとめた所です」云々。予は懇々勸め且祈つたが、兄弟も又靈感に溢れつゝ曾て同君の口より出た事のない程よい祈りされた。「先生今日は全く奇蹟です」などいひ、予もさう思ふた。昨夜の祈は適確にきかれた。御靈は今朝先づ予を感動し、同時に靈化を通して同兄を動かし給ふたのである。歸途悲觀中の家族を訪ひ、親しく實狀を語るや、一家大喜びであつた。近々退院の運びとならう。感謝に堪へない。某大會社の會計主任である。

▲二十八日(日)　今朝は月末、出席は少かつたが、靈感溢るゝ好集會であつた。釜山の讀者佐治豐作兄來訪。晝食を偕にしつつ親しく語つた。株式會社佐治商會の主人公で、實業界に飛躍してゐられる。「旅行中、「日本的基督敎とは何ぞや」「神秘的基督敎」など拜讀、全く共

鳴しました。先生の文章には先生の個性や、人格があり〳〵現はれ、非常に引付けられます。先生どうか長生きして下さい」などいふてゐられた。

三　月

▲一日(月)　好天氣、終日執筆。

▲二日(火)　今朝早天祈禱に出でんと支度中フト感じた。自分は近頃刻々感謝で、毎日喜んでゐるが、それは境遇がいいからではあるまいか、教會も家庭も頗ぶる平和、健康は惠まれ、生活にも餘り困らぬ。三男は出征中だが之れ又元氣で御奉公してゐる。若しそれ一朝裏が出で悲風慘雨、妻子に別れ、生活にも窮し、更に不治の病體と成つたらどうであらうと。かくて今現に窮境に惱みつつ、感謝の出來ぬ兄姉らを思ひやつた。氣の毒である。ダガ併し自分の今の信仰さへ變らなければ、同じ窮境に陷つても斷じて煩悶はせぬつもりだ。却て覺悟は一層堅く、信仰はモえて、朝から晩まで感謝するであらう。境遇は變つても主は變らぬ。愛も變らぬ。どこに不平や煩悶があらう乎。萬一そんなものが頭を出したら感謝の連發でおッ拂はふ。聲の限り、イキの切れるまで感謝し、感謝して死ぬ迄だ。

▲三日(火)　どうしたら人の前でも眞劍な、誠意ある祈ができるかといふに、其秘訣は眼を天にあげ、心を神に集中する事だ。神はどこにでもゐますといふ事に違ひはないが、天は神の御位だ。王座だ。そこに心と眼をそゝがずして敬虔な祈のできる筈がないのである。何事も精神一つだ。食べまいと思へばスキなものでも食べずにスむ。自分は甘味が好きで、執筆中でも覺へず口にするのだが、覺悟すれば何でもない。傍にあつても手は出さなくなつた。之で一つ精神力をタメして見よう。ガンヂー翁は二十一日斷食したではないか。今日三月三日は雛祭り。故郷の春を思ひ出した。机のワキに桃や菜種の花を置いて、有りし昔の父母なつかしく、我が家の門口に咲く桃の花、ウラ一面のコガネ色の菜種畠など思ひやつた。燃料不足のお蔭で、極寒中も未明から大道潤歩、食慾增進し、氣分が甚だ宜しい。一昨年の大患以來、體重十七貫が十六貫と成り、それ以上にチッとも出なかつたが、今日久しぶり風呂屋で計つて見たら丁度十六貫數百目になつてゐた。所謂脂肪太りでなく、寒氣と戰ふて得た堅太りだから嬉しい。

▲四日(水)　去る一日の朝から五日の夕方迄、終日書き通し、考へ通しで六月發行の冊子原

稿漸く完了、五月末春季聖會の方針も立つた。夕食後全身さながら打たれたる如く、臺所で横になつた切り寢入つて了つた。昨日はどうしても頭があがらず、八時過ぎ起きて朝食、龜井戸天神から深川木場の清澄公園まで散歩した。某大名の私園であつたものを岩崎男爵が買入れ、金にあかして修理したので、唐畫その儘の美景だ。今は岩崎から東京市に寄贈して立派な公園になつてゐる。

▲六日(土) 終日讀書や、執筆を廢し、樹下靜かに祈と默想に耽つた。梅はまだ半開だが春氣分だ。次ぎの說敎や、聖餐について深思した。

▲七日(日) 好天氣、集會多く、聖餐も說敎も惠まれてゐた。ステパノは石で打殺される寸前、聖靈に滿たされ、天に目を注いで神の榮光と、其右にイエスの立ち給ふを視た。其時彼は失神狀態で、天の開けたことを實驗したのである。あんなキワどい時でさへ、目を天にあげたら心は開け、氣も快活に成る。まして平時をや。區々たることでフサイだり、煩悶するのは全く不信からだ。ドコ迄も主を信じ、御言を信じて喜ばねばならぬ。集會に案外男子多く、午後疲れて郊外散歩。

▲八日(月) 今朝フト「我は火を地に投ぜんとて來れり」との御言を想ひ出した。火とは燃へサシで、靈的刺ゲキ又は興奮の意だ。眠れる者が目ザメ、消えた者が又燃へ出すのだ。其火が燃へ出すとキツと反對が起る。從つて主は來るべきバプテスマを豫期された。十字架だ。血のバプテスマだ。地上の安きを樂んではゐられない。神と人、人と人との平和が破れ、戰ひが始まるからである。「われ地に平和を與へんために來ると思ふか、然らず反つて分爭なり」(路十二・五一)だ。高慢、利己、虚榮、嫉妬のあらん限り眞の平和は斷じて來ない。主は天火を以て此らをヤキ盡すべく來られたのだ。九州某夫人「……二男に話しますと、僕も一度武本先生にお會ひしたいから、私を連れて上京すると申します……先生どうか私を御導き下さい。尙主人も先生を尊敬しておりますので、此際强く御導き頂く樣にと申して居ります、どうぞ御許し下さい」

▲十日(水) 旅人に踏まれた石と、スミレとが語り合ひ「自分はあれから一層堅くなつた」と石が云へば「あの時パツといい香りが出た」とスミレは云ふた。病氣や、災難は誰にも來る。聖人や、惡人も奇禍に逢ひ、泥棒も慈善家も同じく病氣するのだが、結果は天地の相違

だ。甲は病氣や災難によつて一層高く、潔く成り、乙は反對に前より惡くなる、少くとも善くはならんのである。終日執筆。松本市青山ドクトル「健康長壽は何の爲ぞ」拜讀、先生の御高見至極御同感……先生には何卒御自愛遊ばされ、人類愛の爲一年でも御長命の程祈上げます。七十を二こゆれど國のため、くすしの道にはげみはげまん。

▲十二日(金) 昨夜寢前に勸められて飲んだ船來コーヒーのたゝりか終夜眠れず、暫く雜念に耽つたが、こんな時こそ無心無我のケイ古が大切と、全然頭をカラにした。眼も時々開け、意識は無論ハツキリしてゐるが、何一つ考へない。虛空を行くが如く、海底をくぐるが如く、空々漠々得も云へぬ心地であつた。時計を見れば早や五時過ぎ、直ちに起きて散歩に出かけた。自戒「言の多い事、てがら話、人の顏を見ずして物言ふ事」

▲十三日(土) 好天氣、大倉山公園に遊ぶ。谷一面の梅花、枯艸に家族ダンランの辯當を開く人々も見受けた。予は獨りベンチに腰掛けつつ說敎準備、祈つて歸つた。途中綱島溫泉に立寄り、共同風呂で一浴したが、何といふ人であらう、どこもこゝも超滿員の浴客であつた。

「けふこそばあすは散りなむ梅の花」

▲十四日(日) 我らは主イエスの人氣大に擧り數千の人々が押迫つた時の彼よりも、群衆四散、驚嘆は反感と變つた時の淋びしい彼の方にヨリ强く引付けられる。「汝らも去らんとするか」と云はれた時「主よ、我ら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり」とペテロは云ふたのである。使徒パウロは主イエスほど多數の聽衆を引付けなかつたけれども、傳道の門戸大に開けた時もあつたが「アジアにをるもの皆我に反く」といふた時の失意の彼はヨリ多く我らを感動さすのである。得意の折、人氣大に擧つた時は、誰でも元氣が出て相當働きも出來るのだが、失意の時、非難や、反對の起る時にも悠々迫らず、靈力充ち、少數の人々にも大なる感化を與へ得る人こそ眞の偉人であらねばならぬ。我らは前者より寧ろ後者の態度を學びたい。大阪黑田姉「靈化有難く拜讀、主の大なる惠みの御言葉は、信仰厚き先生の御筆により……只々涙の出る程有難く、信仰薄き私の心にも深く感ぜられ……」

▲十五日(月) 病牀の某令夫人訪問。宿痾の原因がキリストより自分の事をヨリ重く、不斷に思はるゝ結果だと不遠慮に一喝した。若しそれ思想一變、自分や、家族の事よりモツと大切に、晝夜不斷にキリストを思慕さるゝに至らば、病はキツと全癒すべしと云ひつゝ祈つた。

▲十六日(火)　佛教はいい、併しキリストがないからいけない。儒教はいい、併しキリストがないからいけない。神道もいい、併しキリストがないからいけない。キリストは生命だ。生命のない宗教にどんな深い教理や、儀式があつても、斷じて人を活かし得ないからである。然らばキリスト教が一番いいのかといふに必ずしもさうでない。キリストのないキリスト教がある。少くともキリストは名のみで、實なく、父とともに今猶働きつゝあるキリストがないのである。そんなキリスト教に斷じて力はない。看板にイツワリありだ。我らは使徒的キリスト教か、然らずんばキリスト教をも捨つべきである。

▲十七日(水)　過般病める某兄を突然訪問するや、非常に歡び、果ては床から出て一二時間語り通した。中々分つた人物だが、長い間予の日本的基督教に反感を抱いてゐたのである。漸く眞意が分つたとて喜び、今後多少の献金したいが、受けてくれるかとの事であつた。予も其好意を謝し、手を握つて別れた。**大阪住友重役某氏**「……靈化冊子毎號拜受……寢前の暫らくの時間に拜讀、信者ならぬ小生にも修養の資となり、不思議に疲れの癒ゆるを覺へ申候、特に愛顧を蒙りし○子長逝以來時々繰返し拜讀、熱烈なる御信仰に深く敬意を表し、何か共鳴するものを感じ申候……今後は毎號○冊宛……青年社員達に讀ませ度……」

▲十八日(木)　九州からワザ〳〵來訪された某夫人及び令息と夕遅くまで語つた。長い間の靈化讀者だが、健康すぐれず、信仰上の導きをも求めて來られたのである。キリストを體得すべくつとめ、多岐に渡らず、一事を專らにさるるやう懇々勸めた。坐禪も、念佛も、何々療法も、近頃の所謂生長の家も、原理は盡くキリストに籠つてゐる。問題は只彼を體驗し、彼を生活するや否にかかつてゐる云々。

▲十九日(金)　クリスチヤンは、どんな危急な場合でも先づ主を見上げ、御言を思ひ、御名を呼ぶのでなくてはならぬ。訪問客があれば先づ主を見上げて面會し、病人があれば先づ祈つてから醫者に走る。旅行も先づ主を見上げて出發し、受驗も先づ祈つてから試驗官の前に出づべきである。イヤな顏で、イラ〳〵しながら人に接せんより寧ろ遇はぬ方がよろしい。少々待たしても輝いた顏で遇ふことだ。ビク〳〵しながら試驗問題を手にすれば、有る智慧まで引ツこみ、知つた事まで出て來ない。心が落付かないからだ。先づ主を思ひ、主を呼んでから始むべきである。火事だ、地震だ、爆彈だなど云ふ場合でも祈つてゐるのか、勿論で

ある。そんな時こそ一層祈が大切だ。立つたまゝ祈り、走りつゝ御名を呼ぶのだ。何事でもアワてる事は大ケガの元。グヅ〳〵せよと云ふではないが、先づ祈つて心を靜め、ドツシリした態度で手早く、敏活に處すべきである。キリスト信仰は、用無し坊や、年寄りの道樂ではない。時々刻々起つて來る大小緩急の事柄に處して、賢く、力强く働かしむる秘密力であらねば成らぬ。

今日から會堂の修繕に取かゝた。大空襲を覺悟せねばならぬ今日、修繕は如何と思はれるが、延ばせば延ばす程困難で、來年にも成れば物資いよ〳〵缺乏、材料に窮して受負ひ手もなからうとの見込みから匆々着手する事となつたのである。「此宮かく破れをれば汝ら板をもてはれる家に居るべき時ならんや」との御言を思ひ出した。

▲二十日(土) 遠來の某夫人と語りつゝ、何か一抹の霞の懸つてゐる感があつた。如何にせば其霞を開いて天日を仰ぐべきやと種々苦心した。予は嚴然として云つた。「折角遠方から來られたあなたに對し、無責任な、氣に合ふやうな話をして御歸へしする譯にはゆかぬ。或は失禮な言で御叱りするかも知れませぬが、それがイヤなら私は斷然御話も、祈も御免蒙りたい」と。かくて互に語つてゐるうち、機會を見て予は云つた。「奥さん、あなたはキリスト中心でなく自己中心だ。キリストよりモツと强く自己を愛してゐられる。そこに病や、惱みの原因があります。愛が足らぬ、自己愛を棄ててキリスト愛に生きねばならぬ」と。かくて或は默し、或は祈つてゐるうち靈的感動が起つた。雲は晴れ、霞は消えた。忽ちにして天地はガラリと變つた。夫人の歡び甚しく、滿面感謝に溢れてゐられた。青山市電病院に危篤の一青年を訪ふた。親一人子一人で、涙に暮るゝ母の心事を想ひやりつゝ祈つた。

▲二十一日(日) 「汝らの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、汝らを詛ふ者を祝し、汝らを辱かしむる者のために祈れ」仇とは「憎む者、詛ふ者、辱かしむる者」だ。それを愛する道は「善くし、祝し、祈る」ことである。之はキリストの活模範だ。神の絶對命令である。從つて之を守らず、實行しないものはキリストの弟子ではない。天國とは無關係である。どうしてそんな氣になれるかといふに、秘訣は結局祈だ。いかなる亂暴虐待にも、默然たりしイエス、十字架上にて「父よ彼らを赦し給へ」と祈られし主を見上げる事であらねばならぬ。憎んだり、辱めたりする彼を見ず、彼の長所や、美點を考へ、改心した時の理想の彼を想像

しつゝ祈るのである。

▲二十二日(月) 今日から聖週、來るイースター迄、毎日減食し、一切の贅澤をやめ、殊に受難日卽ち金曜日は終日斷食しよう。主の苦難の萬分の一を味はんが爲である。九州に歸らんとする某夫人に對し「あなたの問題はスツカり決しました。此上色々繰返すことは絶對禁物です」と。久しぶり快眠が出來だしたとの事、憂ひの顏は喜びに變つて、令息同道歸國された。昨夜は名古屋の小島牧師、今日は大阪の高瀨牧師等來訪、愉快に語り合ふた。黑田夫人、中井兄等祈に來られた。朝から晩迄祈り通し、語り通した。夕食後はタワイなく眠つて了つた。

▲二十三日(火) 午前中第十部總會出席。最後に短く勸めた。我がキリスト教會も旣に全部日本的となり、教派撤廢した以上、最早何らの遠慮なく、生命であり、靈であるキリストを傳へねばならぬ。之なくんば日本は救はれず、聖められない。が併しキリスト〳〵云つても歷史や、神學のキリストではダメだ。我らが體認し、體得し、體驗し、日夜生活しつゝある活ける、現在のキリストでなくてはならぬ。彼を說き、彼を宣傳する爲には、どんな迫害も

厭ふ所でないと。横濱市山桝兄「……愛の御親書を戴き、非常に激勵され、深く〳〵奉謝候……靈化冊子……全篇非常に有難く拜誦、特に聖書の體得、御言の暗誦について深く示され、共鳴仕候。「十字架の教」表紙裏の御教訓は特に感謝いたし候。いづれ機を見て拜趨御眼にかかりたく念じ居候」

▲二十四日(水) 聖週は主の苦難を思ふて反省し悔悟する時だ。四十日の斷食の前に二三日位の斷食が何であらう。磔殺の死を思はゞ病死や、餓死も云ふに足らぬ。我らの爲に苦難を受けつつ、終始默然たりし主を念じ、虐待や、侮辱に遇ふても一語發せず忍耐するのがクリスチヤンだ。茂木姉の熱心に勵まされ又も青山病院に危篤の一青年を訪ふた。此病に罹つて治つた患者は一人もないと云はれてゐた。過日祈禱中も全然無意識で死體同樣であつたが、祈禱後元氣を恢復し、食事をなし、果ては新聞さへ讀んでゐたので母も大喜びであつたが、又も昏睡狀態に陷り、今日遂に永眠、氣の毒であつた。**伊勢山田病院長小川博士**「……老いて益々元氣に、廣島時代の先生を思ひ返せば全く別人の感があります。孤軍奮鬪克く獨自の見解と信念とを堂々と發揮せらるゝ其熱と元氣には敬服致します……」

▲二十五日(木) 會堂修繕着々進み、一見新築同様になつた。十年は大丈夫だなど云はれてゐる。午後婦人會、キリストをエんとの一大事の故に、平生の交際にも多言を戒め、無益の談話にあたら時を費してはならぬ事を勸めた。**大久保忠臣兄**「……昨年教會就任の節、御懇篤なる御親書を賜はり……感謝……既往を顧みて先生方の御好意と御援助とを心から感謝致して居ります、此上とも御支援を……」

▲二十六日(金) 受難日、終日斷食、主の御苦みを忍んだ。「罵られて罵らず」苦しめられて反抗せず、「正しくさばき給ふ者に己を委ね」た主の御足跡をフマねばならぬと思ふた。夕はシンミリした、好い集りであつた。

▲二十八日(日) 會堂修繕中で、今年のイースターは困つてゐたが、黒田家の好意で、凡ては好都合に運んだ。櫻はまだサかず、雨と寒さで例年の如く多數ではなかつたが、却てシンミリと、ナゴらかで、一同靈感に充たされてゐた。予は復活と共力について語り、「之を怪しむな、墓にある者の皆神の子の聲をききて出づる時きたらん」(約五・二九)との未來の大希望を述べ「汝らの中に宿りたまふ御靈によりて汝らの死ぬべき體をも活かし給はん」(羅八・一一)との現世的結果をも說いた。キリスト教は復活の宗教だ。復活なき所にキリスト教は斷じてあり得ない。

我らは靈魂不滅といふが如き、空な信仰で滿足されない。キリストが墓より復活せる如く、善惡に係らず全人類は一度はキツと復活するのだ。聲も姿も變らない。在りし昔その儘で、親子兄弟再會するのである。アウガスチンも論じたやうに、我らの肉體を構成する地上的材料は、假ひ粉碎され、溶解されても、神は驚くべき迅速さを以て、一瞬間に、我らの肉體を回復し給ふのだ云々と述べた。

說教後、遺族一同を前に整列せしめ、暫し沈默ののち、永眠者一人〳〵の名を呼んで祈つた。黒田邸は煙雨にとざされ、廣々した芝生は雨にぬれて美しく、キレイであつた。黒田夫人のモテナシにあづかり感謝を以て散した。

▲二十九日(月) 從來の日本道德は復讐と立身出世主義が重もであつた。曾我兄弟や、四十七士の復讐美談、太閤秀吉、藤堂高虎の出世物語ほど芝居に、講談にクリカへさるるはない。何度視ても聽いても日本人はアかない。そこに忠誠や、眞情のあふるゝものがあるからだ。

が併し二者何れも道德的標準は低い。日本人は百尺竿頭更に一歩を進めねばならぬ。今日大政翼贊運動の起つたのはそれが爲だ。立身出世を以て人世最後の目的とする時代ではないからである。八紘爲宇の理想と復讐主義とも相いれぬ。四海を兄弟とし、昨日の敵も今日の親しい味方とせねばならぬ。日本は今や道德的にも舊トウを脱して新道德、新理想に向つて進まんとしてゐる事は愉快だ。

夕方關西の尼ヶ崎から三人の孫らがやつて來た。渡臺以來約十年、手紙毎に「おぢいちやん、おばあちやん」といつて來たものが大きくなつて見變る斗りであつた。此二三日は案内役をツトめてやらねばなるまい。又來る時も我ら二人ソロふてゐるかどうか分らないからである。

▲三十日(火) 早朝から明治神宮、靖國神社、宮城より東京驛を巡つて歸る。どこもここもえらい人出だ。

▲三十一日(水) 本所の震災記念館から淺草迄行き雨にぬれて歸る。いつ見ても涙を催さずにゐられないのは震災當時の暗惨たる寫眞や、燒け殘りの遺物だ。

四　月

▲一日(木) 今朝六時の早天祈禱で短く語りつゝ、長い間分つたやうで分らず、思想的に行ツマつてゐた一問題が不思議にトけた。外ではないキリスト體得の道である。生けるキリストをトラふる秘密である。基督敎に修行なしと敎へられてボンヤリしてゐるクリスチヤン程愚者はない。生けるキリスト〳〵と主張しつゝ修行練磨を怠るものも同じく愚者だ。生けりると思ふたキリストはとうの昔に死んでゐる。イノチも、力もないのである。

愈々接續、不斷工夫、失敗にも、成功にも、快感にも苦痛にも、彼を仰ぎ、彼と語り、彼と喜び、彼と泣くのでなくてはならぬ。「我に居れ、さらば我又汝らに居らん」である。彼は妻子眷屬否自分のイキの出入よりモツと近い。我が前にあり、後にあり、右にあり、左にあり、外に立ち、内に宿り給ふ。我らは彼の中に生き、彼の中に動いてゐるのだ。然るにそれを忘れ、それを思はずして心配し、淋しがつてゐるのだから愚者でなくて何であらう。要するに工夫が足りんのだ。練習し、修業せぬ結果だ。讀書中、談話中、歩行中、食事中にも、主を畏れ、主を喜び、寸時の油斷なき事が卽ち彼を知り、彼をトロふる秘密であらねばなら

ぬ。「風はおのがまゝに吹く、汝その聲を聞けどもいづくより來り、いづくへ往くを知らず、凡て御靈に由りて生るゝ者もかくの如し」（約三・八）人の靈的生れ變りも、心の革新も意外な時、意外な邊から來る。全く不思議だ。御靈の働きと云はねばならぬ。夕は山神氏宅集會、反對であつた主人が奇禍にアヒ、遂に入信の實驗談もあつた。

▲二日（金）　主よ／＼とログセのやうに云ひつつ、夢に夢見る心地で、何の力にも成らず、依然として煩悶し恐怖してゐるやうではキリスト信仰も、觀音信仰も變りがない。復活現在の主をマザ／＼拜し、行住坐臥、イキ／＼と彼を感じ、彼と交るのでなくてはならぬ。時々ではダメだ。連續不斷だ。油斷スキマがない。息の出入とともに彼を思ひ、時計のカチ／＼とともに彼を念ずる程でなくてはならぬ。從つて無用の挨拶、ジョウダン無益の會合などする暇はなくならうが、勉强にも、仕事にも能率があがり、いつも快活で、他との交際にも妨げなく、却て信用を博するのである。

▲奈良朝佛教の大ダ落は、餘りに宮中の恩顧に慣れ、政治と宗教を混同して、僧侶が國政に參與するに到つたからだ。ハテは玄昉や、道鏡の如き妖僧を出して國礎を危からしめんとしたのである。

▲カトリックの歴史に於ても同一の跡を見る。三百年間の大迫害からコンスタンチン帝の受洗となり、邪教は一變してロマ帝國の國教となつたが、靈的生命のキリスト教はいつしか俗的ダ落宗教となつて多くの禍を殘したのである。

▲新教とて油斷はならぬ、若しそれ餘りに政府や、軍部の特寵を受け、保護金など頂戴するやうに成れば、いつしか宗教の權威を失ひ、役人らの指圖のまゝに働かねばならぬ事と成らう。敢て國策に反對せよではないが宗教は飽く迄宗教家らしく、神と偕に歩み、貧と迫害のう家ちに傳道すべきである。

▲立身出世や、世俗的榮達を斷念して一意救世の爲に働くべき宗教家にも依然として地位の競爭があり、嫉妬がある。速かに反省し悔改めずんば新教も舊教や佛教の過史をくり返へす事とならう、警戒すべきである。

昭和十八年六月十日　印刷
昭和十八年六月十五日　發行

定價五拾錢　郵稅四錢

著作者　東京市淀橋區諏訪町二二七番地
發行權者　武本喜代藏

發行所　東京市淀橋區諏訪町二二七番地
靈化事務所

印刷者　東京市神田區神保町三ノ二十九
中等教科書工業株式會社
山形精一
東東四二

終